

## 清酒を開発した鴻池新右衛門と 両替商・鴻池善右衛門の事績を訪ねて

〈取材協力〉 荒西 完治 氏（伊丹市郷土史家）

伊丹市の北西端、宝塚市との境界に近い鴻池地区に小さな児童公園があり、そこに小さな稲荷社が祭られている。社の隣に「稲荷祠碑」という石碑があって、次のような意味の漢文が刻まれている。

「この地に鴻池新右衛門の屋敷があった。新右衛門が酒造業をはじめた1600（慶長5）年、事業の成功を祈念して邸内に稲荷社を祭ったが、1763（宝暦13）年の台風で稲荷社が倒壊してしまった。そこで、20年後に新右衛門の子孫たちが集まり、先祖の遺徳を忘れないうために稲荷社を再建し、そのいきさつを碑文として残した」

江戸時代後期の儒学者・中井履軒<sup>なかいりけん</sup>が鴻池家から依頼されて書いたものだといわれる。数年前、筆者は「伊丹・歴史文化紀行」という記事のために、伊丹の郷土史家・荒西完治さんにここを案内していただいたことがあった。このたびあらためてお目にかかり、鴻池財閥の始祖となった鴻池新右衛門（1571-1651）の人と仕事、その後の鴻池家について解説していただいた。

### ■新右衛門の生い立ち

鴻池新右衛門は、戦国武将、山中<sup>やまなかしかのすけ</sup>鹿助<sup>ゆきもり</sup>の長男に当たる。稲荷詩碑では「孫」と記されているが、実際には「長男」が正しい。

山中鹿助は、戦国時代に尼子氏に仕えた武将。出雲の月山富田城で尼子義久が毛利氏に敗れた後、一族の尼子勝久を擁し、「尼子再興」に身を捧げることを誓って、月を仰いで「願わくは、我に七難八苦を与え

給え」と念じたといわれる。その言葉のとおり各地を転戦し、勇猛果敢な戦いぶりが広く伝えられたが、播州上月城の戦いで毛



荒西完治さん

利軍にとらえられ、殺害された。

鴻池新右衛門は1571（元亀1）年に生まれ、幼名を新六といった。父・鹿助は生まれたばかりの新六を山中家の本家に当たる播磨別所氏の家臣・黒田幸隆に預けたが、黒田幸隆は豊臣秀吉との戦いで討ち死に。その後、鹿助の伯父、新六にとっては大伯父に当たる伊丹の山中信直を頼り、新六は鴻池の地で少年時代を送り、元服後は幸元と名乗った。

大伯父の信直は、伊丹有岡城主の荒木村重に仕えていたが、村重は、織田信長から謀反の疑いをかけられて反旗を翻すことになる。信長軍は数万の兵で有岡城を囲み、1年後にこれを壊滅させた。村重は、敵の入城の前に出奔し、毛利氏を頼ったといわれる。

信直は、1年近く続いたこの戦乱の中で亡くなったようだ。ひとりになった新六は、父・鹿助とは異なる道を歩こうと決め、武士の身分を捨て、<sup>しょうこ</sup>商賈（＝商人）として生きていこうと決意。山中鹿助の子であることを固く秘して、名を鴻池新右衛門と改めたといわれる。

## ■清酒「伊丹諸伯」

日本酒の生産地として、現在は神戸の灘が有名だが、その前は西宮、さらにその前は猪名川のほとりの伊丹が、日本酒生産の中心地だった。伊丹は、対岸の池田とともに、室町時代の中期頃から酒造りのまちだ



鴻池稲荷（右奥）と鴻池稲荷祠碑（左手前）

った。それまでの日本酒は白く濁った濁酒<sup>どぶろく</sup>だったが、それを改良し、澄んだ透明な清酒を開発したのが鴻池新右衛門だといわれている。

新右衛門は、麴と掛米の双方に精白米を用い、麴米、蒸米、水を3回に分ける三段仕込み製法を考案して、「伊丹諸伯」と呼ばれる無色透明の酒を生み出した。さらに、冬季に集中して仕込む「寒造り」を採用し、<sup>とうじ</sup>杜氏集団を分業化して、酒造工程を連続させ、量産化を図り、高級酒としての伊丹酒の地位を確立した。

鴻池家の家伝として、主人から叱られた召使の下男が、腹いせに酒樽の中にかまどの灰を投げ入れ、その結果、白濁した酒が清く澄み渡ったという話が伝わっている。実際にはそんなに単純な話であったとはとても思えないが、透き通った清酒の秘密を誰もが知りたがり、新右衛門はそんなつくり話で煙に巻いたのかもしれない。

酒造りとは無縁だった武士の子に、それまでの酒造りの常識を根底から覆すような技術革新がどうして可能だったのか。その

答えを示す記録は見当たらない。ただ、小前亮の小説『月に捧ぐは清き酒・鴻池流事始』では、池田の万願寺屋で働いていた職人の吾作が、給金を払ってくれなかった万願寺屋の下を離れ、新右衛門の下で働くことになり、酒造りを革新しようとする新右衛門に次々と斬新なアイデアを提供し、新右衛門がそれを取り入れていったというストーリーを描いている。

先祖からの伝統を守るべき立場になかったからこそ、新右衛門は新しいアイデアを大胆に次々と取り入れることができたのかも知れない。

## ■伊丹から江戸へ

1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いが終わり、徳川氏による江戸のまちづくりがはじまったばかりの頃、新右衛門は、この透明で芳醇な酒のほとんどを4斗樽に詰め、伊丹から江戸まで馬で運んだ。

1頭の馬の背に振り分けた4斗樽2樽セットは「1駄」と呼ばれた。新右衛門が定めた清酒の販売価格は10駄（20樽）が最小単位であり、10駄、すなわち馬10頭分を10両で販売したといわれる。多いときは、馬100頭を連ねて江戸まで運んだともいう。「伊丹諸伯」の顧客のほとんどは、この国の新しい支配者となった徳川家の家臣たちで、京都・大坂（大阪）での販売量は、それに比べるとごくわずかだったようだ。

鴻池屋に続いて池田の万願寺屋、伊丹の猪名寺屋も江戸への酒の輸送に力を入れたが、「伊丹諸伯」で一步先んじていた鴻池屋の酒の評判がそれによって揺らぐことはなかった。

## ■大坂出店と海運業・両替商の展開

1619（元和5）年、新右衛門は、新たに大坂の内久宝寺町に店を構え、ここで酒づくりと酒の販売をはじめた。1625（寛永1）



黒池（向こうに六甲山が見える）

伊丹市鴻池地区の西に「黒池」と「西の池」という池がある。このほかに「新池」という池があったが、現在は埋め立てられ、兵庫県立伊丹北高校の敷地になっている。3つの池は、かつて「鴻池」と呼ばれていて、この辺りの地名「鴻池」の由来となった。かつての池の名の「鴻池」は、古代の国府がこの辺りにあって、こうのいけ「国府池」が転じたものといわれる。

年には、大坂の沿岸部に衛くじょう（＝九条）島が開発され、ここから船舶が発着できるようになり、以来、新右衛門は、ここを本拠として海上輸送で清酒を江戸に送った。新右衛門はさらに、自らの清酒輸送の傍らで、他人の物資の輸送も引き受けるようになった。

戦乱の世が終わり江戸時代になると、貨幣経済の時代に入った。諸国の大名たちは、領国経営のために金銀を必要とするようになり、それを手に入れるために、大坂、江戸、大津、敦賀、長崎などに蔵屋敷が建てられ、そこを拠点として、年貢米や領内の特産物を販売した。中でも大坂は、全国最大の蔵屋敷の集積地となり、西国大名たちの蔵屋敷がここに集まった。

当初、新右衛門は、酒づくりのための米を蔵屋敷から買入れたのだろう。それがきっかけとなって、蔵屋敷に納められた物品の海上輸送や販売を引き受けるようになったに違いない。さらに1637（寛永14）年からは、蔵米やその他の産物を担保にして、大名に資金を貸しつけるようになった。

このようにして、酒造りに次ぐ鴻池屋の新たな事業の端緒をつくった新右衛門は、1651（慶安3）年に、81歳で他界した。

## ■鴻池善右衛門

新右衛門には、夫人の花との間に8男2女の子があった。そのうちの7男が鴻池村



摂津名所図会・伊丹酒造り（市立伊丹ミュージアム蔵）

の本家を継ぎ、8男の善右衛門正成が大坂の店を継いだ。以来、新右衛門は鴻池家の始祖と呼ばれるようになり、大坂の店の当主は代々善右衛門を名乗るようになった。

初代の善右衛門正成は海運業に力を注ぐ一方で、1656（明暦2）年には、酒造業を廃業して両替商をはじめた。1662（寛文2）年には、天王寺屋五兵衛、薪屋九衛門たきぎや、泉屋平兵衛などと並ぶ、大坂の十人両替のひとりとなった。二代目善右衛門之宗は両替業を拡充し、岡山藩、広島藩などとの関係を深め、三代目善右衛門宗利の時代には鴻池新田を開発し、大坂における鴻池家の基盤と信用を盤石のものにした。

## ■鴻池新田の開発

現在、大阪市と堺市の間を西に流れて大阪湾に注いでいる大和川は、かつては奈良盆地を北上し、玉串川、久宝寺川など、いくつもの小さな川に分かれ、河内地域を横切って、淀川と合流していた。これらの川は大量の雨が降るとしばしば氾濫し、そのために、現在の東大阪市一帯には湿地帯が

広がっていた。そこで、元禄年間に、地元  
の代表者たちの嘆願を容れて、幕府は川の  
付け替え工事を許可。その結果、大和川は  
奈良盆地から西流する現在のルートに付け  
替えられ、それまで現在の東大阪市に広が

っていた湿地帯で、干拓工事と新田開発が  
すすめられた。

鴻池家の三代目善右衛門宗利は、それま  
での大名貸しと両替業で蓄積した巨額の資  
金を注ぎ込んで、1705（宝永2）年、現在



鴻池新田会所（国史跡、重要文化財）正面



本屋の大竈（災害時や不作時、農民に炊き出しを行った）



道具蔵の中の農耕具（農民たちに有料で貸し出された）

1704（宝永1）年の大和川の付け替え工  
事によって、新たに1060町歩の土地が生ま  
れ、幕府は、地元の有力者で希望する者に、  
地代をとって新田開発と耕作の権利を与え  
た。こうしてできた50カ所余りの新田のう  
ち、最大のが面積200町歩の鴻池新田  
で、1705（宝永2）年に鴻池善右衛門宗利  
がこれを買取り、新田開発を行った。土  
地は痩せていて、水はけが悪く、干ばつに  
悩まされたが、油粕や干鰯などを入れて土  
壤改良が行われた。新田の3割が水田で、  
ここでは年貢の米をつくり、7割の畑では  
綿などの商品作物をつくって換金したとい  
う。鴻池新田では、鴻池家から派遣された  
新田支配人が、幕府の支配を受けながら農  
民たちと土地の管理監督を行ってきた。

1707（宝永4）年には、開発工事の現場  
事務所として「鴻池新田会所」が建てられ  
た。ここでは、新田内の小作人たちからの  
年貢の徴収と幕府への納付、新田内の家屋  
や道路橋などの管理補修、宗門改めによる  
住民の管理、養老年金としての高齢者への  
米の配布、道具類（鋤、鋤、馬鋤、踏車な  
どの農具）の小作人たちへの有料の貸し出  
しと補修管理などを行った。会所本屋では  
大竈が据え付けられ、災害や不作時に農民  
たちに炊き出しを行ったほか、白州では農  
民たちのもめごとの裁定も行われた。

鴻池新田と呼ばれる200町歩（200ヘクタール）に及ぶ広大な地域を開発し、この地域の地主となった。鴻池新田には120戸、男女750人が移住。そのほかに入作者が360戸に及んだといわれる。

その後の鴻池家は、江戸時代を通じて両替商として繁栄を続けたが、明治維新後は第十三国立銀行を設立。同銀行はその後、

鴻池銀行となり、1933（昭和8）年には鴻池銀行、三十四銀行、山口銀行の3行が合併して三和銀行に、三和銀行は2002（平成14）年に東海銀行と合併してUFJ銀行に、さらに2006（平成18）年に東京三菱銀行と合併して三菱東京UFJ銀行となり、現在は三菱UFJ銀行と改称した。

※本稿の執筆に当たっては次の資料を参考にしました。荒西完治著『鴻池清酒発祥物語』（[http://aranishi.hobby-web.net/3web\\_ara/personal9.htm](http://aranishi.hobby-web.net/3web_ara/personal9.htm)）／小前亮著『月に捧ぐは清き酒・鴻池流事始』（文春文庫、2014）／宮本又次著『鴻池善右衛門』（吉川弘文館、1958）

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中